

定時制高校で学ぶ外国につながる生徒の現代社会における学び

—フレイレの「意識化」を目指した生命倫理学習—

黒田協子（上智大学大学院（院生））

1. はじめに

首都圏にある昼間定時制高校（二部制）では、約2割強の外国につながる生徒が在籍している。そのため、ほとんどの教科で、外国につながる生徒対象に、個別対応授業を展開している。個別対応授業の受講生は、在県外国人等特別募集枠生徒に加え、一般枠受検生徒でも履修することができる。本実践は、個別対応授業を履修した午後部1年15名の、現代社会での「生命倫理」を扱った学びの検討である。

生徒の背景は以下のとおりである。つながる国、ベトナム（男2名・女2名）、中国（男3名）、フィリピン（男3名）、ペルー（男女各1名）、ブラジル（女1名）、パキスタン（男1名）、スリランカ（男1名）である。また、入学時の日本語レベルは、入門から中上級レベルまでバラバラであり、出席率もほぼ休まない生徒から、本單元において数回出席の生徒まで様々であった。

2. 授業の課題設定

本実践の課題は、文化・宗教的背景を異にする生徒が多く在籍する学校では避けられがちなテーマである（小川 2020）。一方で、定時制高校に通う生徒の退学理由に「妊娠」があげられる現実もある。外国につながる生徒たちは、母国で受けられたであろう性・妊娠に関する知識の伝達が、来日したことで断絶されている現実がある。また、小学校高学年来日の生徒の場合、日本語がよく分からないまま、日本の性教育を保健体育で聞いても何も分からないままであることが多い。このような状況にある生徒から「お腹の中にいたら生きてないんだから、出して（中絶して）いいんでしょう。日本っていいよね。自分の国ではそれ（中絶）できないから。」という発言や、「生理中にヤッたらできるんでしょう」といった誤った認識の発言が寄せられることがあった。実践校においては、保健体育や家庭科の授業で性や命に関する内容をかなり重視しているが、どこか他人事の認識でいる生徒が多いのも生徒の生の声から感じていた。

そこで、筆者は現代社会という授業の枠組みの中で、妊娠・中絶・命について外国につながる生徒がどのように捉えているのかを紐解き、文化・宗教的背景を超えて、命の重みを考える授業実践を「いつか親になる」という視点から、フレイレ（1979）の課題提起型教育実践を行った。

フレイレの課題提起型教育を採用したのは、生徒一人一人の生命倫理観を確認する必要性、日本語能力が異なる生徒全員が発言しやすい環境を作ること、やり取りの中から授業を変更できるからである。本單元は、文化・宗教的背景が異なる生徒に、それぞれの価値観の押し付けや確執を生むのが目的ではない。「妊娠・中絶とはどういうことなのかについて」の意識化（フレイレ、1979）、つまり「妊娠・中絶についてどのように考えているのか、ということを実感的に考えること」を目標にすることで、生徒達の文化・宗教的背景に沿った形で命の重みを考えるためである。

3. 実践内容

実践開始に際し、当初は筆者が生徒の声に危機感を覚え、実践計画を立てた。しかし、実際に授業を展開する中で、いくつもの計画変更が余儀なくされた。一つには、生徒の出席率がまちまちで、1回目の出席者と2回目の出席者が重ならないため進度調整が困難であったこと、という実践校特有の問題があげられる。もう一つは、フレイレの課題提起型教育では、授業の都度、生徒の興味関心・疑問点に変化が生じ、主課題である「命の重み」を検討する上で必要だと感じられる場合は、授業計画を変更したためである。生徒と対話の中から、以下のように実践を行った。

1. 母体保護法の扱い…法的に母体がどのように守られ、歴史的に変化したかを概観
2. 動画視聴がもたらしたもの…無料動画サイトを視聴し、母親の身体の中で、胎児がどのように成長するのかを確認 (<https://www.youtube.com/watch?v=4BhNkWtufXw>)
3. 望まない妊娠についての考察…姦淫・母親の病・経済的理由等による妊娠のリスクを考察
4. 誰が育てるのか、責任論…核家族・大家族・ジェンダー、ネグレクト等についての考察
5. 中絶手術と命の重み…中絶の身体的・精神的負担、経済的負担についての考察
6. 公助という考え方…4.5. を踏まえ、公助という支援の視点を持つ

4. 結果と考察

本実践は、当初、妊娠・中絶に対する生徒の理解の低さ故、それらを軽視しがちな生徒に、命の大切さの理解を目指し計画した。授業を進めていく中で、生徒達は妊娠・中絶を通じ「命の重み」に向き合った。筆者の想定外であった「なぜ人は子どもを生むのか」という問いを生徒自らが立て、クラスで対話を繰り返し、意識化が生じた。宗教的配慮から敬遠しがちな中絶の可否も、病気で、母親と子どものどちらかの命の選択を迫られる場合でも、中絶を拒否するのか、といった生徒同士の対話生まれ、自分とは異なる文化背景の生徒の意見を熱心に聞き省察を行った。さらに、教員は配慮して聞けないような責任論についても「自分が今育てられないから、親に預けるのは責任放棄だ」「だからと言って中絶することはできない」などといった対話生まれた。このように、それまで深く考えることをしなかった生徒が刺激を受け、真剣に問題に向き合い、それぞれが意識化、つまり自覚的に「命の重み」について考えるようになった。このような実践の中で、生徒たち自身が、彼らの生育状況を振り返り、親に育てられていないと感じた生徒が、親の責任放棄だと述べる一方、親の愛を感じるという生徒が対立した。このような対話を通して、生徒が将来的に家庭を持つことへの不安、様々な葛藤を抱え始めた。そのため、単元の最後には、公助という制度、つまり、育児の不安や経済的問題がある場合や、子どもを育てられる自信がない場合には様々な支援制度が利用できることを理解し、明るい将来を描けるようになった。

付記

本実践を発表するにあたり、筆者の研究に理解を示し、激励の言葉を下さった学校関係者の皆さま、授業実践に興味を持ち、感想・意見を下さった東海大学の斉藤先生に感謝申し上げます。

【引用文献】

小川郁子 (2020) 「高校 1 年生現代社会取り出し授業、高校生としての学びをどうつくるか—社会科の学び・日本語力の伸長—」『子どもの日本語教育研究会第 5 回大会抄録』

パウロ・フレイレ著、小沢有作他訳 (1979) 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房